═ 記念講演 ═

真の豊さへの挑戦

朝日新聞論説委員
大　熊　由紀子

「女性問題」に目覚めた私

私は、長いこと、医療、福祉、技術分野の記事を書いてきました。女性問題や男女平等の問題は、他の女性の専門記者がしてくださるから私には関係ない、なんて思っておりました。ところが、あることがきっかけで、女性問題に目覚め、昨年秋には、「女性の、女性による、すべての人のための高齢化国際シンポジウム」を企画してしまいました。二日がかりのこのシンポジウムの最後に会場の皆さんと壇上の専門家と一緒に「マリオン宣言」というものをつくりました。

・高齢者政策決定部門は紅一点から女男半々へ
・寝かせきりから車いすへ、そして座りきりゼロへ
・ハコモノ予算から人手重視へ
・貯金から社会保障へ
・女手から男女手へ

というような十五カ条です。

目覚めるきっかけを作ってくださったのは皆様よくご存じの労働組合のある偉い方でした。朝日新聞主催で五年前の秋に開いた国際シンポジウム「高齢化社会を考える」の司会をしたときのことです。舞台には、各分野の代表が並んでおられました。私、ちょっと工夫をいたしました。

「皆様、お年を召されてもし半身不随になられたら、どのような老後をお過ごしになるご計画か、それで自己紹介してください」と申し上げたのです。

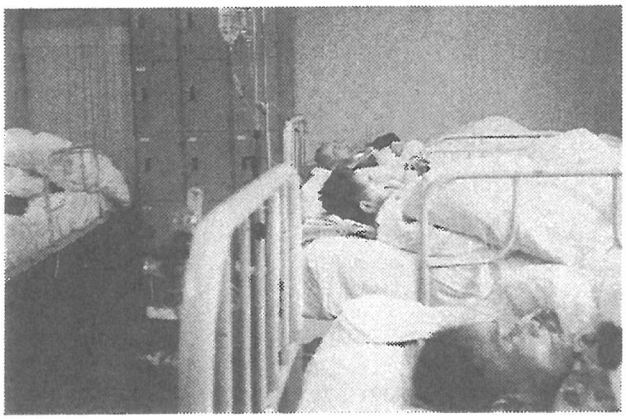
一番右におられたのが労働組合の偉い方ですが、「私、そういう、うっとうしいことは考えないことにしております」(笑い)。そのようにおっしゃいました。

「明日、お倒れになるかもしれないんですけれど」といいましたら、「そのときになったら考えます」。

その左に、財界の偉い方が座っておられました。この方は「家内がおりますので、安心でございます」(笑い)とおっしゃいました。「奥様が先にお倒れになることもあるんですけれども」と申しましたら、「息子の嫁が大変やさしゅうございますので、大丈夫でございます」(笑い)。

この日以来、私は、労組も財界も、右も左も、男の人に任せておいたらとんでもない日本になってしまうのではないかと心配するようになりました。

皆様のお手元に『「寝たきり老人」のいる国いない国―真の豊かさへの挑戦』という本の目次がございます。この



写真①

本は不思議な本です。出版してくれたぶどう社は小さな小さな会社です。編集者、その奥さんの会計係、書店を回る若い人、この三人しか社員がおりません。広告を出すお金もありません。なのに、女の人の手から手へと渡り、もうすぐ十一刷になります。真の豊かさが何か、男性には分からない。男には任せておけない、という熱気が、日本の女たちの中に、今、広がっているからではないかと思います。

それでは、これからスライドを使って皆様を世界各国の高齢者の世界に、そしてハンディをもった人たちの世界にお連れしたいと思います。

「寝たきり老人」は日本独特の言葉だった！

これは「寝たきり老人」と呼ばれている方たちです。(写真①)。私が科学部から論説委員室に移ってまいりましたのが一九八四年ですけれど、当時、どんな資料を開きましても「我が国の寝たきり老人は、西暦二〇〇〇年には百万人になる」と書いてありました。改めて「寝たきり老人」と呼ばれている方たちを病院や自宅や特養に訪ねました。夥しい数のお年寄りが昼間から寝間着姿で、天井をぼんやりとうつろな目で眺めておられました。

何とかしなければいけない。そう思い、日本より高齢化のもっと進んだヨーロッパの国々に出かけました。

ところが困ったことになりました。高齢の方たちのいる施設や病院を訪ねましても、ベッドの上にお年寄りが寝ていらっしゃらない。「寝たきり老人」に当たるドイツ語がありません。スウェーデン語にも、デンマーク語にも、「寝たきり老人」にあたる日常語がありません。「お国には何万人ぐらい寝たきり老人がいらっしゃるんでしょうか」とか「寝たきり老人は家庭でみているのですか、施設でしょうか」と聞いても、「寝たきり老人」という意味が先方に伝わらない。一体なぜなのだろう、というのが始まりでした。

自分ではベッドから起きられない、おむつをしている人たちはどこにいってしまったのでしょうか。

この方（写真②）が、そういう方のひとりでした。デンマークの首都、コペンハーゲンの何の変哲もないデイセンターで写したものです。デイセンターは小学校区に一つあり、お年寄りが毎日、食事や楽しみのために出かける場所です。

日本なら「寝たきり老人」と呼ば

写真②

れる身になる方が、起きて車いすに乗って動いておられます。これが、「寝たきり老人」という日常語がない第一の理由でした。私は四つのことに感動いたしました。

この方は脳卒中の後遺症で左半身が麻痺しておられます。おむつも放せません。日本だったら、養老院カットといって（笑い）、スライド（写真①）の老婦人のように、お世話のしやすいザンギリ頭にされてしまう。なのに、デンマークの老婦人はきれいに髪を整えています。イヤリングをしてマニキュアまでしています。ご自分の不自由な左手でマニキュアを塗れるはずがないのですから、だれかが塗ってあげているに違いありません。右の日本の老婦人は一日中、寝巻きを着せられているのに、左の老婦人はピンクのワンピースに身を包んでいます。

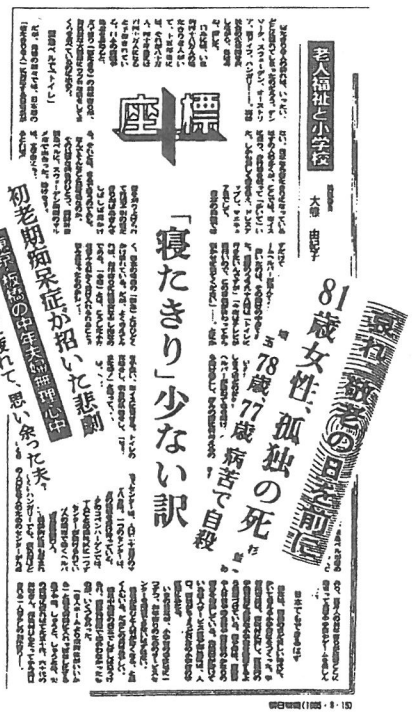
おむつをしてもお洒落ができる

おむつをする身の上になってもお洒落することのできる文化が、この地球上にある。そのことに、大変感動いたしました。たくさんの男性たちが外国を視察しておられるはずなのですけれども、「おむつをしてもおしゃれができる。これぞ真の豊かさ」なんて、おっしゃらなかった。私が女だから、そこに感動したのかもしれません。

二つ目に驚いたのは、この女性が元専業主婦で、一番安い年金をもらっている方だということです。大金持ちの奥様でも何でもないごく普通の人がこのように暮らせる、これが真の豊かさというものなのではないか、と考えました。

三つ目に驚きましたのは、こうしたお世話の仕事をしている男性をしばしば見かけたことです。当時の日本では時給六百円くらい。「男子一生の仕事ではない」と思われておりました。待遇が日本とは大分違う、働きがいのある仕事だということは後でわかったのです。

四つ目に驚きましたのは、この女性が、夕方には自分の家へ帰るのですが、そこに「お嫁さん」がいるわけではない。奇特なだんなさんがいるわけもない。一人で暮らしてらっしゃるということでした。日本では、家族がいなければ、写真①のように、死ぬまで病院や施設にいなければいけない。デンマークでは家族がいなくても、半身不随でおむつをしてい



写真③

ても住み慣れた自宅で暮らせる。そのことに私はさらに驚きました。

その秘密の第一は、毎日ベッドから起こしてくれる市町村のホームヘルパーさんが、人口当たりで日本の二十倍ぐらいいるということでした。この人たちが朝起こしてくれる。だから寝たきり状態にならない。そこで私は、「『寝たきり老人』は、実は『寝かせきりにされたお年寄り』なのだ」というキャッチフレーズをつくりました。八五年の敬老の日の朝日新聞の一面の大型コラム「座標」(写真③)にこう書きました。

「寝たきり老人」という言葉は日本独特のものだった。「寝かせきり」にするから「寝たきり」になってしまう。ホームヘルパー、デイセンターの支えがあると、お年寄りは自宅で誇り高く生きていける。

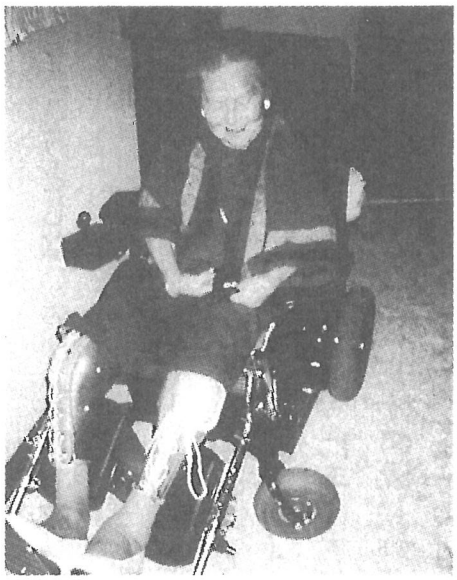
先日、ライバル紙に「寝たきりは、寝かせきり」という大みだしを見つけました。「寝かせきりはごめんだ」という連載をした新聞もありました。厚生省も、「寝たきりゼロへの十ヵ条」をつくりました。もし特許をとっておきましたら、今ごろ大金持ちになっているかもしれません(笑い)。

でも、最初から皆、そう思ってくださったわけではありません。厚生省はほとんど関心を示してくれませんでしたし、お医者さんたちは、「寝たきりになるような年寄りは適当に殺しているんだろう」(笑い)などと、物騒なことをおっしゃいました。実は、私も、どこかに寝たきり老人の集団が隠されているかもしれない、と心配でした。そこで、夏休み、冬休みを主に利用し、老後の貯金をおろしまして、世界のあちこちを回りました。

市役所が「出前」する

アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ベルギー……こうした国を回ってみて、私は、「欧米先進国」という言葉を社説で使うのはやめようと思いました。あとでスライドをお見せしますが、アメリカの高齢のお年寄りの中には、恐ろしい扱いを受けてない方たちがいらっしゃいます。北欧の中ではスウェーデンよりもデンマークのお年寄りの方が幸せそうだということにも気がつきました。

この方(写真④)はリューマチの後遺症で、手がこぶのようになっています。自分の力では歩けません。そういう方も、電動車いすで、おしゃ

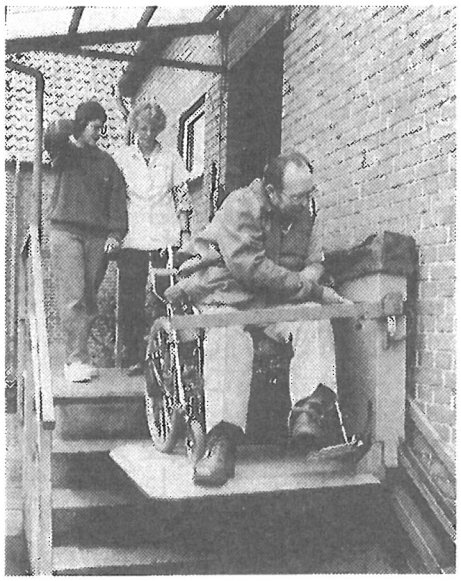


写真④

れをして歩き回っておられました。

日本のお年寄りのように寝かせたきりにされていますと、「廃用症候群」といって、寝たきり状態のコチコチになってしまいます。それだけではなく、床ずれができてしまいます。とても痛いものです。看護職の方はこのスライドを見ても「もっとひどいのがあるわ」なんておっしゃるだろうと思います。骨が見えているものとか、この何倍もの大きさのものが「寝たきり老人」と呼ばれている方たちはおしりにできていのです。デンマークでは、このような床ずれがまずありません。

デンマークでは、それぞれの市町村が独自にいろんな工夫をしております。これ（写真⑤）は、ネストベッズという町に住む半身不随の男性です。この方が脳卒中の発作を起こし病院にかつぎ込まれた時のことをお話します。意識が戻りますと、病院から市町村の在宅ケア係の方に連絡が入ります。すると、役所の人が病院に出かけていきます。日本では、おそばやてんぷらの出前がありますけれども、お役人は窓口から動こうとしないのがふつうです。デンマークなどでは、食事の出前はとても贅沢なことですが、お役所の〝出前〟〝御用聞き〟はごく当たり前に行われております。



写真⑤

ご本人の病室で、主治医、訪問看護婦、理学療法士、それから市役所の人が相談をいたします。ご本人が、「特別養護老人ホームに行きたい」と希望すれば、そのように手はずが調えられます。自宅へ帰りたい。でも、奥さんに死に別れ、帰っても一人住まいという事情ですと、退院したその日からホームヘルパーさん（写真⑤の左の女性）が来るように市役所が段取りをつけます。訪問看護婦さん（真ん中の女性）の手配もいたします。

それだけではありません。家の中を車いすでも自由に動き回れるように、家から外に出られるように、入院中から住宅の改造もしてしまいます。退院した日から家の中を車いすで動き回ることができるわけです。

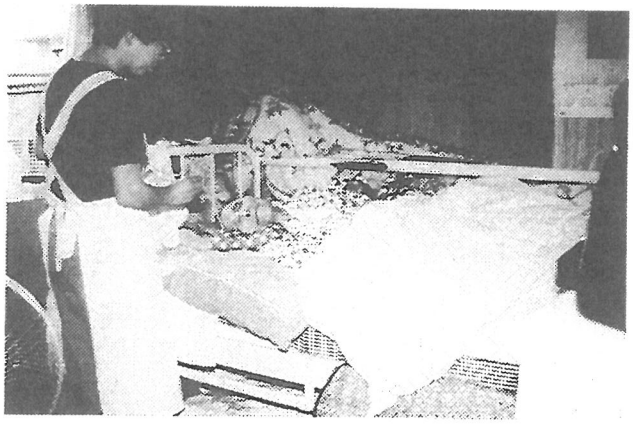
女工哀史か姥捨てか、の地獄の選択

これ（写真⑥）は、日本の在宅ケアです。日本の在宅福祉や在宅医療は、丈夫なお嫁さんが家にいて無給で介護することを前提にしています。この女性たちの労働条件は、日本に残っている唯一の女工哀史の世界ではないでしょうか。三百

六十五日お休みはない。二十四時間、いつ呼ばれるかわからない。

連合では、介護休業制度をつくろうという運動を進めていらっしゃるそうですけれど、もし皆様が介護休業をとってお家へ戻って、このような女工哀史的な暮らしをするのだったら、「労働運動の勝利」なんて、到底いえないと思います。

北欧でも家族がお世話をすることはあります。その場合、市町村はホームヘルパーの費用を払わないで済むわけですから、ヘルパーさんに支払うのと同じだけのお給料が市町村から家族に出ます。ご家族がご家族をみている場合もホームヘルパーさん同様に週休や夏休みがあり、そのときにはプロのホームヘルパーさんが来てくれます。家族はへとへとボロボロにならないでも済むのです。



写真⑥

介護休業では高齢化社会は解決しない

「介護休業制度ができれば日本の高齢者福祉が解決する」かのごとき幻想を抱いている男性たちを時折みかけます。とんでもない思い違いです。皆様方が正しい方へ導いていってほしいと思います。

写真⑤のホームヘルパーさんはお休みもありますから、いつもはつらつと笑顔です。写真⑥のお嫁さんは、この過酷な労働がいつまで続くだろうかと不安そうです。

育児休業と介護休業には、大きな違いがあります。育児は何十年も続いたりしません。日毎に楽になります。お年寄りは、皆様が介護を手厚くなさればなさるほど長生きをなさいます。お姑さんが八十歳までお元気ですと、お嫁さんと呼ばれる皆様は六十近くまで介護休業なさる（笑い）のです。

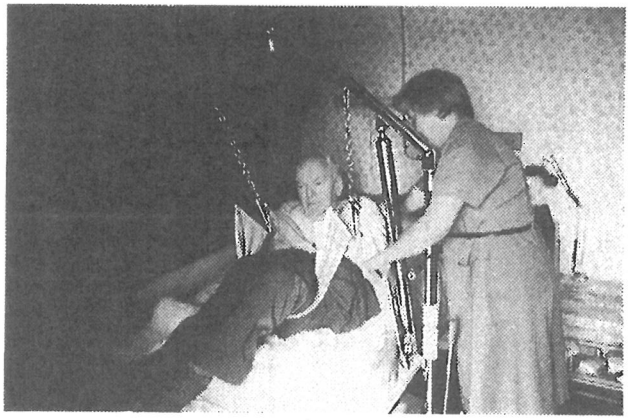
プロとアマでは介護の質も違ってきます。写真⑤のデンマークのヘルパーさんは、手は出さず、でも、じっと見守っています。写真⑥のお嫁さんは「うちの嫁はきつくて」とかいわれると大変なものですから（笑い）、至れり尽くせり何でもして差し上げてしまいます。

病院で寝かせきりにされている方、あれは人手不足のために寝かせきりにされていますが、ご自宅におられるお年寄りが寝たきり状態になってしまうのは、アマの悲しさ、親切でついつい何でもしてあげてしまって寝かせきりをつくってしまうのです。

ホームヘルパーさんや家族がお世話で腰痛になったりしな

いように、電動リフト（写真⑦）が使われております。日本でも、たとえば東京の柳原地区では九十歳のおじいちゃまを七十歳の坊ちゃま（笑い）がみておられました。車がついていますので、お風呂場に連れていくときにも使ってかいがいしくお世話をしておられました。日本の男のエンジニアたちは、「介護ロボットをつくろう」とか、「看護ロボットをつくろう」とすぐにいいますけれども、そういうものよりも、まず、人手を助けてくれる、安くて丈夫で、日本の住宅の中でも使いやすい電動リフトをどんどん開発してほしいのです。電機労連の方は、会社に帰ったらよくそれをおっしゃっていただきたいと思います。

この重症筋無力症で寝返りもできない人ですと、ホームヘルパーは、夜中、寝返りを打たせにも来てくれます。障害の軽い方ですと、一週間に一回掃除にきます。おむつをしている方の場合は、トイレに行きたくなったときは、電話をかけると近くの詰め所からヘルパーさんが飛んできてくれます。



写真⑦

電話をかけられないような事態には、ＳＯＳのボタンを押すと助けが飛んできてくれます。（略）

在宅という名の密室ではなく

日本の在宅ケアと違って北欧では、送迎サービスが親切にできているので、昼間は外出するのがふつうです。先ほど申し上げたデイセンター、大体小学校区に一つぐらいずつあります。日本でも小学校に空き教室がいっぱいできていますから、厚生行政と文部行政の縄張りを越えて利用すれば、きっといいデイセンターができると思います。そこで、リハビリも継続できます。

デイセンターで一番みんながよく利用されるのが食事です（写真⑧）。写真⑥と見比べると、日本の老婦人はとても重症、デンマークの老婦人たちは軽症。だから表情が違うのだろう、と皆様思われたのではないでしょうか。

実は、私自身も四、五年前までそのように思っておりました。ところが、そうでない

写真⑧

ということを、日本の特別養護老人ホームの方たち、それから病院の熱心な看護婦さんたちが実証してくださっております。

これは、群馬県の伊勢崎市の特別養護老人ホーム愛老園です。ここには、先ほどの映画の夢の中に出てきただんな様みたいな、気はやさしくて力持ちの男性が三分の一ぐらいおられまして、お年寄りは全部起こしてお食事を差し上げる作戦を始められました。

例えば、娘さんのことを「あなた様はどなた様でございましたか」みたいなボケてもいらっしゃる方。この方を、とにかく起こして差し上げました。起こして五日目のお顔です（写真⑨）。起きてはおられますけれども、デンマークのデイセンターで食事中の女性に比べるとご機嫌斜めです。「何であたしゃ起きなきゃなんないんだい」（笑い）といった顔をしておられます。

写真⑨

起きると目が輝く！褥瘡も消える！

この方の六カ月後のお顔でございます。ザンギリ頭をやめにしまして、美容院でパーマをかけ、毎日起こして差し上げて、いろんな楽しみ事をみつけて差し上げた。そうしたら、このような表情になられました。これ（写真⑩）はその数日後、伊香保温泉に職員の方と一緒に行ってらった時のものです。このころには、ぼけも回復なさっています。愛老園は一年ががりで「寝たきりゼロ」を達成しました。その一年後、お年寄りのお尻の褥瘡もゼロになったのです。

この方は大阪の中小企業の社長さん。二年近く寝たきり状態でしたが（略）。

「寝たきり」は「寝かせきり」によって製造されるというお話をいたしましたが、実は、ボケのお年寄りも日本では大量に製造されている形跡がございます。これは、国立療養所菊地病院でつくったボケの世界からお年寄りを引き戻してくる二十ヵ条からとったものです。

・急激な変化を避ける。

写真⑩

・頼りの人となる。
・安心の場を与える。
・孤独にさせない。
・尊重する。

皆様の周囲に、ぜひともボケさせてやりたいというような方がいらっしゃったら、この逆をなさればいいわけです（笑い）。遠くにいるお姑さんを呼び寄せ、故郷のお馴染みと切り離しますと、ボケたり、うつ病になったりします。

デンマークの老婦人は、自宅に暮らしておりますから急激な変化がなく、ボタンを押せば、人がすぐ来てくれますから安心です。電動車いすでデイセンターへ出かけますから、孤独ではなく、尊重されています。脳卒中やリューマチになっても、それがもとで、うつになったりボケたりしなくて済みます。

ところが、日本では、お年寄りの施設や病院、精神病院、知的なハンディをもっている人たちの施設は、人里離れております。お見舞いに行きにくい場所です。これは神奈川県の真愛病院という美しい名前の病院です。保健所の監査では「中の上」とされています。ここで夜の六時から朝の六時まで、このような光景が繰り返されています（写真⑪）。朝日新聞から出ております『ルポ老人病棟』に載っている写真です。

私にも夫が一人おりまして、大熊一夫というのですけれども、ふつうの家庭の性別役割分業とはちょっと違った役割分業をしております。家事は夫は料理、私は片付け。仕事では夫の方が、このスライドのような「こういうことがあってはならない」ということを体当たりで取材いたします。

「では、どうしたらいいか」「こんないい仕事をしている人々がいる」というのを私が取材する（笑い）。こういった仕掛けになっております。

日本の病院はなぜ縛るのでしょうか。とにかく看護婦さんが足りません。老人病院は、基準がとても低く、しかも人里離れていますから、夜勤など一人いるかいないか。ナースコールにこたえていたらクタクタになってしまいますから、電線をつないでありません。放って置かれるお年寄りは気持ち悪がっておむつを外してしまう。ベッドが汚れて仕事がふえる。そこで、縛ってしまうわけです。

もっとも、「縛る」などという外聞の悪い言葉は病院ではお

写真⑪

使いになりません。専門用語がちゃんとありまして、「抑制する」（笑い）と品よくおっしゃっています。

夜ごと縛られる何十万人ものお年寄り

このような病院、決して例外的な病院ではありません。私が社内で受ける相談で最近一番多いのは、「おふくろを見舞いに行ったら手や足に縛られたようなアトがある。だんなの記事に書いてあった『抑制』っていうんじゃないかと思うんだ。絶対縛らない病院を教えてくれないか」というような相談で、毎週のようにございます。日本の中で、今、何十万というお寄りが、夜はこんな姿になっておられるのです。

悪い病院だけみせるとフェアではないかもしれませんので、これは、厚生省ご推薦の老人病院でございます。ここは、お薬の量が少ないと評判なものですからこちらは内科の先生のお母様、こちらは外科の先生の奥様、隣の部屋には製薬会社の元重役さんが入院していらっしゃる（笑い）。

ただ、この方たちの様子を拝見しますと、デンマークでしたら自宅に住み、車いすで外出できる方たちなのです。

日本の寿命は世界一といわれますが、命が長くても寝かせきりにされ、縛られ、一日中ベッドの中で過ごすのでは、長寿社会とはいえないと思います。

昼間は寝間着ではなく、今日着たいものを着る。入れ歯を外され刻み食ではなく、歯でかんで食べる。住まいらしい空間に住み、人と目と目とを見交わしてコミュニケーションできると、自然笑顔がわいてきます。何かの役割を果たすことができ、誇りや希望がもてる。そうした「生活の質」、流行の言葉でいいますとクオリティー・オブ・ライフが高くなければ、長寿でなく長命にすぎないのではないでしょうか。

デンマークでも、すべての人が自宅にいるわけではなく、特別養護老人ホームにあたるプライエムもあります。ただし一九六〇年の基準でも、ひとりひとりが自分のお部屋をもっています。団らんや趣味、食事の部屋がありますから、孤独ではありません。

アメリカのナーシングホームはいすに縛る！

では、ちょっとアメリカへ行ってみます。アメリカでは、要介護のお年寄りたちの面倒は主に娘さんがみます。娘さんがへとへとになるとナーシング・ホームに入るのですけれども、これはたいてい株式会社でして、リッチな名前がついております。けれど介護の中身は、リッチとはいえないようです。なぜなら、言葉がよくしゃべれなくていい仕事がみつからない、日本だと「外人労働者」と呼ばれるような方たちの仕事とされる傾向があるからです。

アメリカはボランティアが大変盛んだといわれております。

でも、日本の男性たちが期待する「介護ボランティア」は、いません。介護の仕事は給料をもらってする仕事、これが日本以外の先進国の常識です。ただ、欧と米では介護にたずさわる人の待遇や誇りがまるで違います。アメリカでは、奥様方がする仕事ではない、移民してきたばかりのような人たちが3ヵ月ぐらい勤めて、いい勤め先があったら、辞めてしまうような仕事と位置づけられています。

デンマークですと、ホームヘルパーさんが、時給換算で二千円くらいです。介護職の社会的評価が、お年寄りの受ける介護の質や安心感や笑顔にあらわれております。

アメリカの専門家は、「日本には寝たきり老人というコンセプト（概念）があるそうだけれども、我が国にはそのような概念はない」というように威張るのです。確かにベッドからは起こしてくれます。「ベッド・イズ・バッド」、つまりベッドに寝かせたままは悪いこと、という言葉があるのですけれども、起こしたあげくに、いすに縛ることがしばしばある（写真⑫）のです。

写真⑫

アメリカでも、若くて体が不自由なだけですと、日本よりはずうっと豊かな質の暮らしをすることができます。たとえば、これは、私の高等学校時代の同級生の千葉敦子です。がんになってから十一冊も本を書いて、いろんな人を励まし続けました。（略）

けれど、競争社会、税金を惜しむ自助努力の社会アメリカは、挑戦する力のない人々には冷たい社会でもあります。

介護や看護の仕事を軽視する社会は……

「どうせ女のする仕事だ」と介護や看護の労働者を大切にしない社会では、安心して年をとることはできない、このことを肝に銘じていただき、皆様の運動の重要な課題にしていただきたいのです。

デンマークでは、10年前に「高齢者医療福祉政策三原則」が作られました。お年寄りのために立派な施設をつくって至れり尽くせりのお世話をする、それが社会として高齢者への親孝行だと考えていたのに、お年寄りは幸せとはいえないようだ。それよりも生活を変えないでいいようにサポートする「人生の継続性を尊重」が大切だということになりました。何でもかんでも全部して差し上げるのではなくて、「残っている能力を活かす」ことが大事だ。自分の人生のあり方はご自

分で決め、それを周りが尊重する「自己決定の尊重」が貫かねばならない。この三原則が現場に浸透してゆきました。

高齢者医療福祉三原則も次第に日本でも知られるようになりました。心配なのは、残存能力の活用を「根性で頑張れ」と曲解する方がおられることです。「日本の年寄りは自立心がなくて困る」「自助の精神が大切である」と大蔵省などがいう。自助を貯金と勘違いしておられる人もいます。

デンマークやスウェーデンでいわれている「残存能力、自己資源の活用」は、自助ができるように回りの条件を整えることです。他人のめがねを借りてもよく見えません。車いすも同じです。その人その人の体によく合わせ、車いすの質が保証されるよう、作業療法士が常に各国の補助器具を探し、評価をし、それぞれの人に合わせます。こういった支援があるから、日本だと「寝たきり」になる人が起きて動き回ることができるわけです。

車いすでも歩き回れる町づくりを！

そのための費用は想像するよりずっと少額です。国民一人が毎年二千円ずつ出しますと、必要とするすべての人に車いすを自宅用、別荘用、職場用と3種類貸し出すことができるし、家の改造もできる。様々な補助器具も貸し出すことができているのだそうです。

ただ日本では、駅などは階段しかなく、車いすの人を駅員さんがプリプリしながら持ち上げる姿をみかけます。これですと、気が小さい人はとても頼めず、家に閉じ込もることになります。デンマークでもスウェーデンでも地下鉄には、必ずエレベーターがあります。車いすの人だけでなく、足が弱った人、大きな荷物をもっている人が自由に動き回ることができます。「寝たきり」にならないためには、街や店や駅のつくりも重要です。このことにも、どうか関心をもっていただきたいと思います。

これは、散歩中の男性です。この方のことを日本だったら「首から下が動かない人」というだろうと思います。デンマークだと、「首から上が動く人」というようにいいます（笑い）。首から上が動くという残存能力を活用して、電動車いすを一人で運転することができます。

日本の私たちは、同じ人を寝かせっきりにし、その方たちに「寝たきり老人」という失礼なレッテルをはりつけています。「寝たきり老人」という言葉が日本にしかない。その背景には、人間をどう見るかという文化の違いもあることに、私は次第に気づいていきました。

本を書くきっかけになったシンポジウム「真の豊かさへの挑戦」のプログラムの表紙です（写真⑬）。絵文字で「ノーマリゼーション」を表しています。

写真⑬

真の豊かさのキーワード「ノーマリゼーション」は、ノーマリセーリングというデンマーク語です。どんなにハンディキャップが重くても普通（ノーマル）に暮らせるように周りの環境を整えることです。

この思想を世界で初めて法律に盛り込んだ人は、バンク＝ミッケルセンさん。デンマークの元厚生省の社会局長です。ナチのレジスタンス運動をしていて強制収容所に入れられていたその経験が、ノーマリゼーション思想の背景にございます。時間がありませんので、くわしくは本の第二章をご覧くださると幸いです。（略）

それは、知的なハンディの世界から始まった！

これは、デンマークの重い知的なハンディをもっている人の共同住居のトイレです。北欧では、こうした人たちが五、六人で、家族のようにして街の中に暮らしています。みんな自分の部屋をもっています。トイレにはドアがあります。「一九五九年法」という法律で「どんなに知的なハンディをもっている人も街の中の普通の家で普通に暮らせるように」と定められたのです。

日本ではどうでしょうか。東京育ちなのに、東京は土地代が高いというので、秋田や山形の施設に収容されることがしばしばあります。部屋は雑居。羞恥心なんかなかろうとドアもないトイレもあります。（略）

年をとったり、知的なハンディを負ったり、精神病になったりすると、アブノーマライゼーションの世界に放りこまれてしまうのがこの日本です。

ノーマリセーリングという言葉は、お隣のスウェーデンにもすぐ広がりました。スウェーデンでも知的なハンディをもっている人は街の中で暮らし、仕事をもっています。職業につくのが難しい人はデイセンターに出かけていきます。そこでは、織物をつくったり、パンを焼いたり、つまり、何をしているのかよくわかるような仕事が選ばれております。

日本の精神薄弱者小規模共同作業所などは、大企業の工場

のひ孫請みたいな仕事を黙々とやったりしています。

デイセンターは、畑仕事のグループ、織物のグループ、染め物のグループ、木工のグループというように分かれております。どの仕事かは、自分で選ぶのだそうです。

感心したのはこのグループです。

「何もしたくないグループ」なのだそうです（笑い）。

高齢者医療福祉三原則の中に「自己決定の尊重」というのがありました。それが知的にハンディのある場合でも尊重されているのに、私は感動しました。

それにひきかえ、日本ではご本人には相談しないで、親と役所の人が決めて、人里離れた精神薄弱者更生施設に入れられてしまう。随分違います。

どんなに知的なハンディをもっている人も、自分らしい家をもち、選んだ仕事をもち、余暇を楽しみ、友達をもつ（写真⑬）、それがノーマリゼーションです。

皆様の職場ではどうでしょうか。

新聞社や中央官庁の男性などは、仕事場が住まいみたいなものになっています。余暇も仕事も同じ顔触れ、時々奥さんの顔を見に通う（笑い）というような感じです。

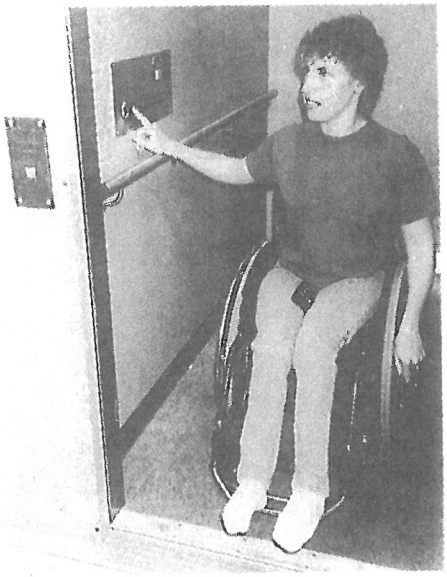
知的なハンディをもつ人の世界で始まったノーマリゼーションの考え方は、移動のハンディキャップをもつ人たちの世界にも広がりました。

障害者とハンディキャッパデと

今、私は、「身体障害者」といわずに「移動のハンディをもった人」と申しました。

二十年前、私はスウェーデンで「ハンディキャッパデ」という言葉に出会いました。三週間ぐらいスウェーデンにいてスウェーデン語も察しがつくようになり、ハンディキャッパデという言葉は障害者という意味かなと思ったりしていました。ところが「由紀子は今日はハンディキャッパデだから」いわれびっくりしました。ハンディキャッパデは、状態をあらわす言葉だったのです。

この方（写真⑭）は移動についてのハンディキャップをもっています。でも、体にあった電動車いすがあり、エレベーターのボタンが手の届く位置についており、街が平らにできていれば、そのハンディは限りなくゼロに近づけることかできます。私が、大きな荷物をもっていても、だれかが持ってくれたり、手押し車があれば、ハ



写真⑭

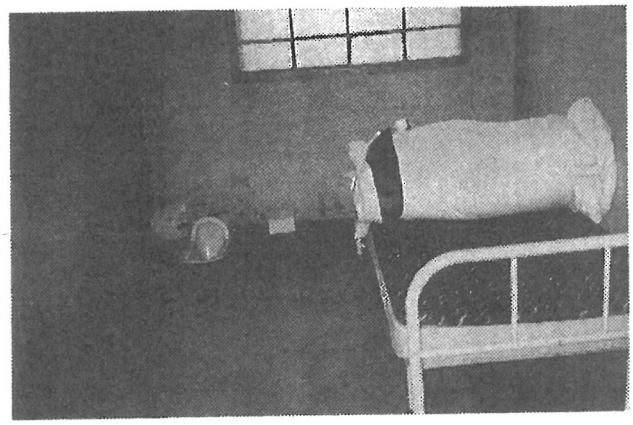
ンディはゼロに近づきます。

ハンディは周りの条件次第で幾らでも小さくすることができるのです。

知的なハンディをもった人を人里離れた施設に隔離するようなこの日本では、皆様もお年を召されボケの症状がでたりすると精神病院に送られてしまう運命が待っています。

日本以外の先進国では精神病院のベッド数がどんどん、どんどん減っています。それなのに、日本だけふえています。二十年前に二十四万だったのが、今三十五万です。しかも、かぎで閉じ込める昔ながらの病棟や刑務所よりずっと居心地の悪い病室が夥しく残っています（写真⑮）。

デンマークやスウェーデンでは、グループリビングという方法でボケの重いお年寄りを支えています。これは知的なハンディの人たちを支える中で編み出された方法です。ボケのお年寄りは、かなり重くなっても日中デイケアに通うことで悪化を食い止められるのですが、病気が進んで、



写真⑮

とても自宅に住めなくなってきますと、昔風の家で、五、六人ずつ、職員が丁寧にお世話します（写真⑯）。

なじみの居心地のよい空間、なじみの人間関係、そこにゆったりとした時間を流れさせる。そうすることによって、異常な行動が消え、穏やかになっていきます。

スウェーデンの大阪にあたる、マルメ市に勉強に出かけた高知医大の精神科の女医さんで真田さんとおっしゃる方がいます。日本でよく見かける「重度痴呆性老人」を探して病院や施設をくまなく歩き回りまったのだそうです。ちょうど、私が七年前に「寝たきり老人」を探し歩いたようにです。

でも、とうとう、見つからない。お世話の仕方次第で「寝たきり老人」だけでなく、「痴呆性老人」も激減するとしか考えられない、といっておられました。

写真⑯

「終身利用権」は「一生利用できる権利」ではなかった

お金をためて有料老人ホームに入れば大丈夫か、というと

そうでもなさそうです。

今、国会で外口玉子さんという看護職出身の議員さんが政府を追及しておられるのですけれど、「終身利用権」という言葉から「一生個室で暮らせる」と思いこんで多額のお金を払って老人ホームに入っても、病気になったり体が不自由になったりすると、老人病院や系列の特養やお仲間の介護型有料ナーシング・ホームに入れられてしまうことが頻発しております。

有料老人ホームでは、「経営者の利益」と「お年寄りの利益」が相反しています。お年寄りご本人は、長く生きたい、いいお世話を受けたいと思います。一方、経営者の方は、入居者が早く病院やあの世へ行ってくださる方が経済的にはうれしい。その空間の利用権を別の人に売ることができるからです。このように相反する利害関係にありますから、個室に長くいてもらおうという有料老人ホームは珍しい、という嘆かわしい結果になってしまいます。

介護型有料ナーシング・ホームに、夫が潜入して調べたところによりますと、入居金の高いところでは、磁石のついた特別製のベルトで縛るのだそうです。

これは、去年の朝日新聞の8月の夕刊です。ペンシルベニア大学のリチャード・エステス教授が、世界の百三十四ヵ国について客観的な数字を使いまして、どこの国が一番進歩しているかの番付表をつくりました。それによりますと、デンマークが世界一、二位がノルウェー、三位スウェーデンでした。日本はずうっと下がって十四位、アメリカ十八位、ソ連四十二位でした（表）。この表は右に人間自由度指標による順位を載せてありますが、傾向は同じです。この順位は私が肌で感じた、要介護のお年寄りの幸せ度の順位にとても似ているのです。

住み良い国番付と人間自由度指標　（1990年）

国名	Estes Rによる WISP'90 順位	得点	国連開発計画による HFI'90人間自由度指標 順位	得点
デンマーク	1	(108)	2	(38)
ノルウェー	2	(103)	7	(35)
スウェーデン	3	(102)	1	(38)
オーストリア	4	(101)	6	(36)
オランダ	5	(100)	3	(37)
フランス	6	(98)	8	(35)
ドイツ	7	(98)	9	(35)
イタリア	8	(97)	21	(29)
フィンランド	9	(97)	4	(36)
ベルギー	10	(97)	10	(35)
スイス	11	(96)	12	(34)
イギリス	12	(96)	16	(32)
アイルランド	13	(95)	23	(27)
日本	14	(95)	15	(32)
カナダ	15	(93)	11	(34)
ニュージーランド	16	(93)	5	(36)
オーストラリア	17	(91)	14	(33)
米国	18	(90)	13	(33)

年四兆円足せばデンマークなみの高齢者福祉が可能に

上位の三か国と日本やアメリカとどこが違っているのでしょうか。アメリカ、日本、北欧は全部資本主義の国です。はっきりした違いは、上位三ヵ国では、女性たちが政治や行政に深く関与していることです。

「女性の女性によるすべての人のための高齢化シンポジウム」には、ノルウェーから労働大臣に出ていただきましたけれども、あの国では、今、総理大臣が女性で、十九人中九人が女性の大臣です。

スウェーデンでは、昨年九月、政権が社民党から保守連合に移りました。けれど、保守政権になっても、大蔵大臣は女性ですし、国会の議長も女性です。スウェーデンでは一番右の穏健党でも、日本の社会党より福祉を大事にしているように見受けられます。政権が変わったからといって日本なみに福祉が切り捨てられることなどありえない、というのがスウェーデン人の誰もがいうことです。

右のスライドの国々、左のスライドの国々。福祉へのお金のかけ方、確かに違っております。どのくらい違うのでしょうか。

デンマークのホルベックに私と一緒に行った関西大学の一園光弥教授が計算なさいました。左のスライドでお見せしたデンマーク並みのホームヘルパーさん、デンマーク並みの寮母さん、看護婦さん、ふんだんな補助器具、そういうものを用意するとしたら、日本の人口だと毎年にあと四兆円づつかかるという答えが出ました。

四兆円というと高いとお思いかもしれませんけれども、医療費が、今年度、年二十三兆円ですから、その六分の一ぐらい。日米構造協議で毎年使われる公共投資が四十三兆円ですから、その1割弱を高齢者福祉に回せば、デンマーク並みのことが日本でもできるということになります。

では、なぜデンマークではできて日本ではできていないかを考えてみますと、議会とか政治とか行政の世界にぶつかります。

これ（写真⑰）は、デンマークのカルンボーの市議会の風景です。全く偉そうでないごく普通の、それこそボランティア精神に満ちた議員さんたちです。女性もたくさんおり、三～四割は女性です。本当に生活に根差した政策がここで語られます。

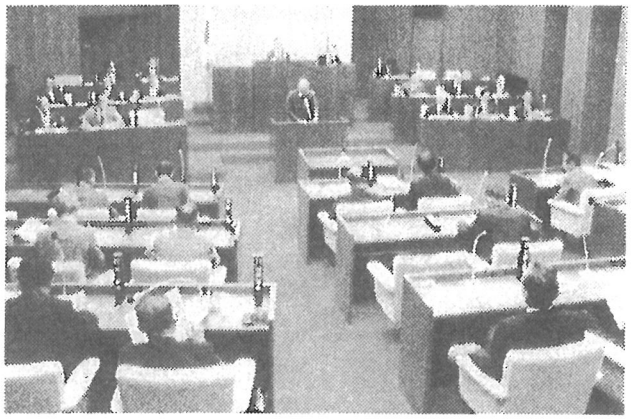
写真⑰

連合でもノルウェーの40％クォータを取り入れては？

ノルウェーには、「40％クオータ（割当て）」という制度があって、例えば公務員や大臣のような公的な仕事は、一方の性が40％以下になってはいけないことになっています。選挙の比例代表名簿に女性議員を少なくとも40％のせる政党も増えています。

連合でも執行委員をノルウェー式で決めてはいかがでしょうか。そうすれば、少なくとも40％は女性が選ばれることになり、連合の政策提言は政府と一味も二味も違ったものになり、「さすが」と評価が高まるのではないでしょうか。

こちら（写真⑱）は、日本のある小さな町の議会です。とても偉そうな赤いじゅうたんが敷いてございまして、偉そうな男の方たちが背広を着ておられます。傍聴してもおもしろくありません。なぜかというと、筋書が大体決まっていて、そのとおりに議事が進むからです。本当の打ち合わせは、どこかの料亭で、土建屋さんの皆さんと議員さんの皆さんがご相談になる、というようなことになります。そこで「女優のこれこれ君と僕にペアウォッチをくれればドームの予算がつくようにしよう」（笑い）とかいったたぐいの相談ごとのミニ版が全国各地で行われています。四十三兆円の公共投資がコンクリートになってしまって人手の方に回っていかないということになります。



写真⑱

一九九〇年に福祉関係の八つの法律が変わりました。権限が市町村にどんどんおりてきています。国会の改革が無理でも、皆様の代表が市町村の議員さんに出ていかれれば、市町村から変えていくことができる、それが日本を変えることにつながると思うのです。

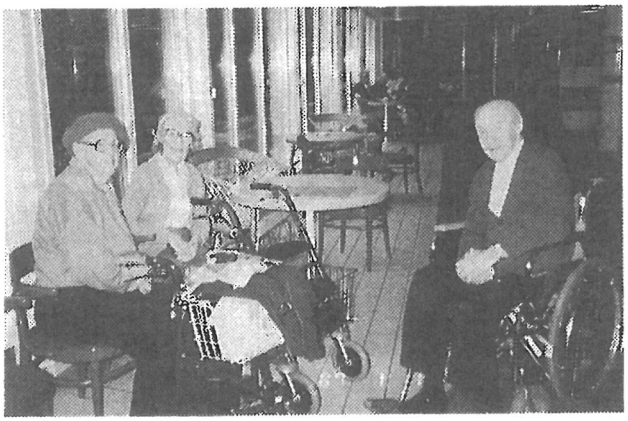
当事者の経験を政治や行政の場に

北欧の国々では、女性も障害をもった人たちも、積極的に政治や行政の中に参加しています。これは、目が見えないヘルシンキの市議会議員です。彼女は建設委員会の一員で、目の見えない人、体の不自由な人が使いにくい建物はどんどんやり直しを命じています。右の男性は、補助呼吸装置がないと生きていけないので、フィンランドの国会議員の時、色々な法律を作りました。（略）この方は、つい先日、日本に来られた、スウェーデンの前厚生大臣ベンクト・リンクヴィストさんです。十七歳のときから目がみえません。

ハンディをもつ人の痛みが分かる人が行政や政治に参画していく。これは、とても大事だと思います。

日本の厚生省にも横尾和子さんという審議官がおられ、彼女が政策課長さんだったときに、ホームヘルパー10万人計画を盛り込んだゴールドプランや、寝たきりゼロ作戦の土台がつくられました。

女性が政策課長というポストにいたからこそできたのだと思います。



写真⑲

これ（写真⑲）はスウェーデンの町の中のデイセンターです。障害の重いお年寄りは上の方の階のケアつき住宅に暮らしています。一階にデイセンターがあって、趣味や読書、食事を楽しめます。そこにご近所のお年寄りも遊びに来ます。家族が犠牲になって泣く泣くお年寄りを幸せにするということでないのです。

女性が変えた北欧の福祉

また、日本が出てきたかとお思いかもしれませんが、実はスウェーデンの三十年前の姿です（写真⑳）。雑居で、寝たきり状態の方もおられます。ここに一人のジャーナリストが現れました。イーヴァールロー・ヨーハンソンという人で、こういうことは許せない、とキャンペーンをしました。当初は、そんな暗い話はしないでほしいと無視されたらしいのですが、世の中は次第に変わっていきました。女性も大いに活躍しています。スウェーデンのお年寄りが寝かせきり状態から救われた功績者の一人は、去年の「女性の女性によるシンポジウム」にお呼びしトールバーンという女医さんです。ボケのお年寄りをグループリビングで支える方法を確立したのはベックフリスさんというやはり女医さんです。

日本の縛られたお年寄りや床ずれのお尻ばかりみてお帰りになりますと、今夜うなされるといけませんので、日本でも頑張っておられるところを幾つかご紹介をしたいと思います。これは、富山県の庄川町の老人保健施設です。デンマークからいろいろ学びまして、全部個室で、団らんの部屋もある施設をおつくりになりました。（略）

東京の江戸川区では、電話を一本区役所にかけると、区役所の人が来てくれます。そこでいろいろ相談をして、改造の費用を全額区でもつ、そういう制度を始めました。（略）

平均一軒平均八十万円かかるのだそうですけれど、「特養ホームのお年寄りは月々三十五万円、十ヵ月入っていたら三

百五十万円かかるのだから改造費なんて安いものです」と区長さんはいっています。中心になっている住宅係長は松崎悦子さんという方で、女性ならではのきめ細かな仕事をしておられます。

これは九州の春日市社会福祉協議会。会長さんが労働組合委員長出身の方だったせいもあり、住民の身になった非常に先覚的なサービスをしておられます。一日二回三百六十五日食事が届けられるものですから、このお年寄りは、幼なじみのいる故郷で暮らすことができます。

厚生省も変わりました。ホームヘルパーさんの賃金も年間百万円アップして三百十八万円になりました。ホームヘルパーの仕事の仕方について「脱・お役所仕事のすすめ」と私が名付けた思い切った手引きも作りました。

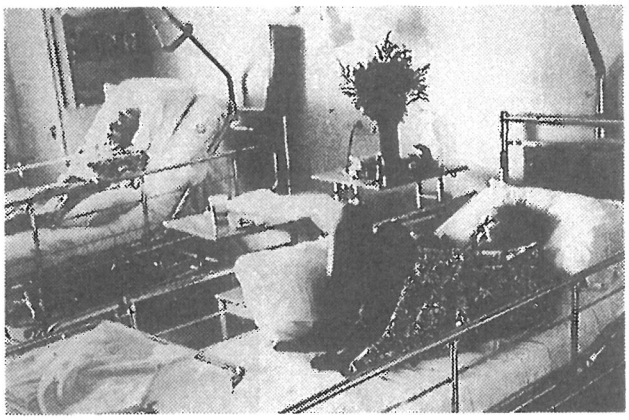
ホームヘルパーの予算が増えたことを知った長野市の労働組合は、市役所の職員の人とホームヘルパーさんと全く同じ待遇で採用することを市に求め、それが実現しました。効果はてきめんで、看護婦免状をもった女性、福祉大学を出た男性たちが「一生をかけるに値する仕事だ」と続々と志願してきました。大阪府は、ホームヘルパーの報酬の市町村負担分を県でもつことにしたそうです。日本の市町村もいま変わり始めています。このあたりの事情については、ぶどう社から出る「ほんとうの長寿社会をもとめて市町村からの新しい波」を読んでいただけると幸いです。

日本の男性も少しづつ変わってきています。「男も女も育児時間を！」と主張する「育時連」という運動もあります。子どものためにも親のためにも、労働時間を短縮したり、早退を認めたり、つまり、「育児休業」「介護休業」以外にいろんな選択を作る。その方が、男性に育児や介護の喜びを味わってもらうためにも、いいと思います。（略）

ほんとうの男女平等のある国とない国と

今日は、右側に「寝たきり老人のいる国」を映しました。左に「寝たきり老人のいない国」を映しました。

七年間勉強して、右は「本当の男女平等がない国」、左は「本当の男女平等に近づいている国」だと思うようになりました。右は、民主主義国を標榜しつつ、実は、「本物の民主主義でない国」、こちらは「本物の民主主義に非常に近づきつつある国」ではないかとも思います。



写真⑳

今日、ここにこれほどたくさんの女性たちがお集まりになり、目を輝かして聞いてくださったことを、とても心強く思います。いくら待っていても私たちが変えないと、世の中は変わらないようです。私も社説や記事を書くことで小さな貢献できれば、とおもっています。皆様のエネルギーに期待しています。熱心にお聞きくださいましてありがとうございました（拍手）。

（女性局から・講演は左右約八十枚のスライドを用いて行われました。ここにはその一部を掲載しました）